

創刊に当りて

—敬天愛人と西郷南洲—

学 長 長戸路政司

敬天愛人は西郷南洲の魂から迸り出たものであるから、先ずその魂の本質が特に偉大な点を明らかにする必要がある。それについて西郷南洲の人物の成長過程を見ましょう。

南洲は天性の優秀なる素質の持主で、何となく偉大なる何物かがあったことは見逃せない。それに加えて知識欲旺盛で、その当時としては、第一等の読書人といってもよろしいほどで、青年時代に禅に入り、熱心に座禅につとめられ、更に孔子孟子等の儒教を究わめ、特に陽明学については、相当造詣深く、また佐藤一斉の言志録を念入りに研究され、自らその内の百一章を集めこれを常に愛読された。これらの知識を通じて、東洋の天について相当深く思いを潜め、真剣に想を錬られた。南洲はいかに天を研究し体得し我が身に消化されたか、その研究の深さは当代第一等といってよかろうが、その研究は哲学の領域にまで進み、更に飛躍して強き信仰の範囲まで入ったと思われるが、これを把握したチャンスは何時何処であったか。それについて南洲が僧月照と鹿児島湾に相共に投海し、月照死し、南洲も一旦死んだが奇跡的に救い上げられた。その瞬間の天意と、米国宣教師フルベッキにつき、熱心に研究されたキリスト教のゴッドに対する信仰につき簡単に述べて見ます。

当時時勢は激変また激変して、徳川幕府より明治維新に移らんとする時代の流れが、社会の底に流れて、日本の幾多のいわゆる英雄豪傑と称せらるる者が活躍し、当時幕府方には伊井大老が弾圧に弾圧を加え、強烈なる圧制のもとに、吉田松陰・橋本左内等の年若き偉人が皆死刑に処せられ、僧月照も幕府に追きゆうされ、南洲は近衛家の特別の依頼により、月照を庇護し、ついに追われ追われて、京都より鹿児島までおちのびたが、鹿児島藩もすでに幕府方となり、ついに両人はここをも追い出されて進退きわまり、月照とともに錦江湾に身を投じた。両人は海底に沈み、ついに月照は死したが、南洲は海中より引き上げられ、かろうじて蘇生した。この瞬間が実に南洲にとり正に千番に一番で、神との出会いとなり、神との生命的なつながりができ、ここに南洲の人格は地上より天上に上げられ、天来のインスピレーションを受け、靈感にふれ、ゴッドに占領され、ついに我が一身を神にささげ、神より天来の使命をさずけられた。それは日本の救済であった。すなわち江戸城あけ渡しであった。もしそのとき日本において、天皇の軍と幕府の軍と江戸に於いて大戦争となったなら、日本の運命は実に惨憺たるものであった。日本の周辺には、イギリス・フランス・ロシア・アメリカが虎視たんたんとして、にらんでおったので、彼らはたちまち日本を分割し、または植民地化したに相違ない。実に危機一発、日本の盛衰存亡はこのときにあったので、これを立派に切り抜け、日本の完全独立の基礎を作ったのが南洲の使命であった。これが南洲に授けられた天来の使命で、この使命は、海中より

救い上げられた瞬間にひびいたに相違ない。

次に米国の宣教師フルベッキとの邂逅について申し述べよう。1853年米国のペルーの艦隊が浦賀に来て、翌年日米和親条約を締結され、居留地内でキリスト教会を建て、礼拝することができるようになったので、キリスト教の宣教師がしだいに日本に来了。1859年には長崎に教会が建てられ、フルベッキがそこに宣教師としてまいられた。フルベッキについて南洲ははるばる長崎に赴きてキリスト教を勉強した。その仲間には後藤象二郎・江藤新平・副島種臣・小松帯刀・大隈重信等もおった。その門下生500人以上におよび、彼の名声天下にかくれもなくなった。明治2年東京大学建立に協力し指導するため、太政大臣三条実美の懇願により上京した。フルベッキは南洲の偉大な資質を認め、熱心にキリスト教を講義され、聖書は漢文を用いた。南洲は前記のごとく東洋の天の思想に相当造詣が深かったので、フルベッキのキリスト教のゴッドと天とを比較検討して、南洲の心中に大いなる何物かが動いたに相違ない。南洲をつかまえた天は、それはすなわちキリスト教のゴッドで、東洋の天と比較検討して南洲の心中に大いなる何物かが動いたに相違ない。南洲をつかまえた天は、それはすなわちキリスト教のゴッドであった。南洲の信仰は深みに入り、我が身において天人合一の信念はいよいよ深まった。以上のごとく天性の偉大な資質を有する南洲は——独断かも知れませんが——非常に深き宗教心に恵まれたもので、孔子孟子の天の思想、陽明の良知の思想に加えて、フルベッキによるキリスト教の思想に満たされ、

更に錦江湾において、神に救い上げられた神秘を総合して、ここに日本はもちろん世界的ともいうべき大いなる魂が完成され、アメリカにリンカーンあり、日本に西郷南洲あり、といわゆるに至った。その人の魂の底より、信仰の奥底より迸り出たのが敬天愛人である。これについて二、三申しましょう。

南洲は天は人も我も一様に愛するから、我は我身を愛するうちに、人を愛するなり。という句があるが、これは敬天愛人の注釈ともいってよかろう。これについて先ず第一に思うことは天の思想である。天すなわち神に対する研究・認識・信仰を深めるべきことである。それについて、ある有名な心理学者の言として、道德宗教の信念、信仰に入るには、16, 7歳から22, 3歳までの時期がもっとも大切で、この時期にこの思想にふれなければ、一生縁なきものにおちいるといわれたが、私はこれはもっともと思い、高校生大学生のときにこの思想にふれることを希望する。

第二に愛人である。この愛は普通の人情とか、情愛とかいう意味ではなく、これは人間の魂の奥深い所からわき出ずる愛で、いわゆる神の声ともいうべきものの深い愛で、我が敵をも愛する愛敵の愛である。これは容易ならざる問題だが、歴史始まって以来後世までも崇敬されるものは、皆この愛の実践家であります。

本学学生諸君よ、年若い感受性の強き時代に、我が存在の意義、我が人間としての使命感をしかと掴み、二度と生まれないこの大切な人生を一段と光り輝く気高き立派なものに致しましよ

創刊の辞

う。これは真剣な問題です。この場合のカギは実に敬天愛人の経験体得であります。本学先生方におかれても敬天愛人をしかと心にとめて下さい。偉大なる教育者ペスタロッチが自己をかえりみて「真に人を愛する途は、よくこれを教育するに有り。」と言われたが、われわれは教師として誠心誠意よく学生諸君を愛しましょう。学生諸君よ、真によく教師を敬しておりますか。両者の敬と愛がピッタリと一致しておる処に本学園の教育があります。ここは本学園にたいする天の至上命令として、われわれ一同先生方も学生諸君も力強く立ち上りましょう。

此の度、本学の諸先生が日頃の御研鑽の一端を論文集として刊行することになりました。これはまことに喜ばしいことです。学問的な真理の探求が、敬天愛人と結びついて、世に光りを放つことを確信いたします。ここに本学建学の精神の一端を述べて創刊の辞とします。

昭和43年9月5日